

説教 「生き生きとした希望」 エゼキエル 37:15-58 ペトロ I 1:3-9 2023. 11. 5

仙川教会代務者（ユーカリが丘教会牧師）大串 眞

皆さん、今日は、天に召されたわたしたちの教会員、教会で葬儀をされた方をわたしたちは覚えながらそのご遺族や関係者の方々共に礼拝をささげております。また、ひとつのグループの方々のことも覚えたいと思います。それは、生きておられる間は、クリスチャンになられなかったけれども、家族の中にクリスチャンがおられたご家族の一人であります。

聖書の中にこういう箇所があります。使徒言行録 16:29～31「看守は、明かりを持ってこさせて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外に連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」これは使徒パウロが伝道旅行中に起こったあるエピソードです。使徒パウロの伝道旅行は常に、迫害とか困難がつきものでした。そういうことが山のように襲ってきたのですが、そんな中でも変わらぬ姿勢で福音を宣べ伝えながら旅行をしていました。ここはフィリピという場所ですが、ここでも、特に犯罪に手を染めたわけではなく、ただ福音を宣べ伝えていただけなのです。占いの霊に取りつかれている女の霊を追い出したのです。そういう癒しの業も行っていたのです。ところが、その占いを商売にしていた主人が自分たちの商売が邪魔をされたことから、あることないことを役人に訴えて、パウロとシラスは、獄に捕われてしまったのでした。そんな困難が合っても、動じることなく、真夜中の暗い獄中で讚美歌を歌っていたといえます。獄に捕われていた囚人たちは、その声に聞き入っていたのです。また、獄の看守も聞いていました。何か心に響くものがあつたのだと思います。その後事件が起こります。大地震が起こったのです。獄のかんぬきははずれ、囚人をつなぐ鎖もはずれてしまいました。うとうと眠ってしまった看守が目を覚ますと、牢の戸はみなはずれていたで、囚人たちは皆逃げてしまったと思ったのでした。当時のローマ帝国内では、このような不祥事を起こした獄の番人は厳しく罰せられ、死刑となつたのでした。看守は自害しようとしてしました。すると、真つ暗な獄中から声が聞こえてきました。「自害してはいけません。わたしたちは皆ここにいる。」戦争や災害では、民衆は暴動を犯す事が多いです。しかし、囚人は皆、逃げないでその場にいました。それは、使徒パウロたちの堂々たる態度、何事にも同じない平安。そこに醸し出された聖なる雰囲気皆が圧倒されてしまったからです。参つてしまったからです。

そして、この看守もです。使徒たちの態度、かもしだす雰囲気。「聖なるもの」と言つてよいでしょう。聖なる雰囲気皆に圧倒され、看守から救いを求める言葉が発せられました。その言葉に応えた使徒パウロの言葉が先ほどの言葉です。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」これは、イエスを信じる者が救われるだけではないのです。その家族も救いの中に与るといふ。祝福の広がりと言うのです。

わたしはユーカリが丘教会が本務教会ですが、ユーカリが丘教会では、永眠者記念礼拝と呼んでいますが、その礼拝の案内をする時に、天国会員と教会で葬儀をした方、そして、教会の家族。そういう方々を覚えて共に礼拝をしますとご案内しています。教会員の家族の永眠者も覚えて、祝福の中にあることとして礼拝をしています。

さて、今日の説教題は「生き生きとした希望」としました。ペトロ 1:3 の言葉そのものであります。この言葉は、前の口語訳聖書では「生ける望み」となっていました。新しい聖書協会共同訳では「生ける希望」です。いずれにしても、単なる知識として知っている程度も希望ではなくて、心踊る、じっとしてはられない。将来に対する明るい展望というだけでなく、現在、生きていく

上での支え、エネルギー、パワーそういう意味です。新共同訳の「生き生きとした希望」ということという訳は、ふさわしい表現だと思います。先ほどの使徒言行録のフィリピの獄の看守が、使徒パウロたちに感じたのも、何か言葉での説明を越えたことでした。聖なる生きておられる神が迫ってくる。そういう神の臨在が迫って来ることだったのです。そんなわけで、今日はわたしも、できるだけ言葉の説明は避けて、証しとして経験したことをお話したいと思います。皆さんがその中で、感じ取ってくださることを聖霊にねがうものです。

さて、二人のことを皆さんに証しとしてお話したいと思います。

最初の方は、横山幸夫さんといいます。わたしは、今、ユーカリが丘教会の牧師をしながら、北総カフェというものの責任者として、いくつかの教会と協力して定期的になんかカフェをしています。そのきっかけとなったのが、横山幸夫さんでした。わたしが、今から5年前にユーカリが丘教会に赴任する時のことです。まだ牧師として就任する前から、教会の引き継ぎ事項として、教会員にがんの末期の患者がいて、ぜひ対応していただきたい。ただし、この方は、牧師の就任に間に合わないかもしれないという。そこで、例外的なことですが、4月に着任する前に、お会いすることになりました。聖隷佐倉市民病院と言って、ホスピスのように緩和ケアをする病棟に、横山さんは入院されていました。それから5月末に召されるまで2カ月近く。何となく、お訪ねして、お話を伺ったり、わたしが聖書の話しをしたり、お祈りしたりして過ごしました。横山さんが話された大きな課題は、まず、救いの確信をつかみたいということでした。キリスト教の救いの核心部分。イエス・キリストの十字架によって罪が赦され神と和解を得ていること。永遠の愛の中で、死後、天のみ国に入れること。死を恐れる必要はないということ。限られた不短い時間でしたが、わたしとしては聖書の言葉を読みながら、共に祈るという仕方でも進めていきました。そういう中で、横山さんは、ゆるしと愛と永遠のいのちを確信されて、死への恐れから解放されたいくご様子でした。いや信仰的に、そのような恐れと戦っておられました。わたしたちをそんな横山さんを祈りで励ますことしかできませんでした。横山さんは、教会の聖餐式に与りたいけども、最後は体力的に厳しくなったので、病床聖餐式をいたしました。その際に、わたしは、パンとぶどうジュースをもっていかなくてはならなかったのですが、ぶどうジュースが手に入らなかったのです。そこで、それならばと、ぶどう酒を買って行って、病床で、聖餐式をしました。

主イエスが最後の晩餐で、神のみ国に入るまでは、ぶどう酒は飲まないと言っていることを引いて、横山さんと、天国ではイエス様や、兄弟姉妹と宴会をしましょう。そこで大いに杯を交わしましょうと言いましたらとても喜ばれました。

横山さんは、お元気な時はお酒が好きだったのです。お酒の話になると、大いに盛り上がりまして、赤ちょうちんをくぐってひとりでちびちびやるとのがお好きだったそうです。そんなお酒の話や、死後は、守護天使になって、みんなのところに来てくださいとお願いをしました。教会を見守り、遺された方々を見守る。そんな想像も、一緒に楽しく語り合ったものです。

また、たばこがお好きでした。緩和ケア病棟は多少そういうことがゆるされるのですね。時々屋上に行ってたばこを吸ってこられる。その姿は何かかっこよかったです。また教会員の方も何人かは、面会がゆるされて親しく交わっていたのですが、横山さんを励ます立場の者たちが、逆に励まされるという感じでした。死に向き合って厳しい現実には確かにあるのですが、その死を乗り越えた信仰の世界。深い平安。永遠の愛があふれる。そんな交わりを与えられたのでした。ある時、わたしは横山さんと話しながら、直観的に与えられたことをお話しました。「横山さん、ここに教会がありますよ。ここにこれからのユーカリが丘教会があるように思います。」そんな言葉が出てきまし

た。

それから、横山さんは天に召されていきました。しばらくの時間が経ちました。しかし、その時のことがきっかけで、ユーカーが丘教会と千葉県北、北総地区のいくつかの教会でがんカフェが始まったのであります。がんカフェではいろいろな人の経験のお話を伺います。表面的には明るくしていても、とても厳しい戦いをされていることも伝わって参ります。がんカフェでは直接信仰的な話しをしないようにしています。一般の人が入りやすくしているからです。でも、わたしは、牧師して、一貫して同じ確信の上に歩んでおります。聖書が語る福音。ここにある救いは、生き生きとした希望、生ける希望があるということです。

もう一人の方は、宝田愛さんという方です。この方は、お亡くなりになりましたが、評論家の山本七平さんのお母さまでした。無教会の信仰の流れだったと思いますが、クリスチャンでした。実は、私が高校を卒業して、東京神学大学に入学した時に自分を入れて11名のクラスメートがいたのですが、その一人が山本七平さんの御子息でした。神学校入学がゆるされて、落ち着いた頃だったと思います。山本七平さん宅に私たちは招待されて夕食を戴いたのです。その中で、宝田愛さんはいらっしやいました。もうかなりのご年配だったと思います。ところが、その交わりの中で、愛さんが、一番元気だったのです。そして、その場を仕切られたのです。愛さん曰く。「あなたの信仰は何ですか。」と問われたのです。しかも迫力満点で。神学校に入学したばかりのわたしたちに迫ってくるのです。順番に答えさせられました。まるで神学校入学試験の面接のようでした。「わたしの信仰」そんなこと考えたこともなかったです。わたしなどは当たり障りのない。なんとか面絶試験をパスできるような、できるだけ神学っぽい言葉を探して答えたものでした。一通り、わたしたちのつまらない答えを聞いてくださったあとで、宝田さんはおっしゃるのです。「わたしの信仰は、いのちです。永遠のいのちです。まもなく、わたしにはお迎えがやってきます。でもわたしは嬉しいのです。だってイエス様と一緒にいられるのですよ。今よりもっと近くイエス様と一緒にいられるのです。こんなうれしいことはないです。わたしの信仰はいのちです。」

圧倒的な迫力で、しかも生き生きと、満面の笑顔で、信仰告白をされて、証しをされた。帰路に就く時に、その道中で大いに反省させられました。わたしたちの信仰はなんと形式的で言葉だけで生命がないのか。力がないのか。そういう反省もあったのですが、なんとといっても宝田愛さんからあふれ出していた、生き生きとした希望、そのいのちがわたしたちにも注がれているような感覚が残っていました。この宝田さんの姿は、今も心に焼き付いているのです。

わたしが、横山幸夫さんのように死に向き合いながらも乗り越えていかれたように強い信仰があるか。宝田愛さんのように、いのちが躍動して生き生きと証しをしているかということ、心もとない、弱弱しいものです。しかし、全く無いということ、それも違うように思います。

聖書が証している救い。そこで語られている福音は、確かにわたしたちを捕らえ、生かし、勇気を与え、元気を与えてくださるということは、アーメンと証しさせていただきます。今日この召天者記念礼拝で覚えている先達は、この希望に生きたのです。天にある主のみもとに確かにある。それを信じて良いのです。主にあってわたしたちを見守ってくださっているのです。このことを受け取って参りましょう。またこの礼拝に参加された皆様の上に、この生き生きとした希望が、少しでももたらされますようにと祈り願います。祈ります。